

肥前松浦寿昌寺・如意輪観音像と仏師幸心

竹下正博（佐賀県立博物館）

玄界灘にいでむ肥前松浦の地は、中世には畿内と外国を結ぶ重要な拠点であった。そのため、この地には中国や朝鮮の美術作品がおおく伝えられ、地域的特色とされる。その一方で、日本で制作された作品が目立つことは少なかったように思われる。

しかし、中世松浦のひとびとの美をもとめる視線は、外にのみ向けられたのであろうか。

松浦市志佐町の寿昌寺は、中世松浦党の雄といわれる志佐氏の菩提寺であった。本尊の如意輪観音像は、像高 83.8 センチメートルの六臂の坐像。檜かと思われる針葉樹を用いた寄木造りで、玉眼を嵌入し、表面を漆箔で仕上げている。

これまで本像は、研究者の目にふれることはほとんどなかった。しかし、その太づくりの体軀、やや大きめの頭部、厚い唇が印象的な顔立ちは、一三世紀末に慶派正系の仏師湛康（幸）の活動にはじまり、西国湛派と呼ばれる一派との関係を予想させた。九州の彫刻史を研究するうえで見逃すことのできない作品と思われたが、今夏、幸にも調査がゆるされ、一部はずれた像底板のすき間から、体内に康永3年（1344）の造立銘と仏師幸心、大檀那源（志佐）有らの名を確認することができた。

幸心は、幸は湛康（幸）に、心はその弟子かと思われる湛真と音が通じることから、西国湛派に含まれる仏師と思われ、そのことは先に述べたように作風の上からも了承される。八尋和泉氏により研究の先鞭がつけられた西国湛派には、これまで、湛康（幸）、湛誉、湛真、湛勝、湛秀、湛能らの名が知られているが、ここにあらたな一員をくわえることができたことは大変に喜ばしい。

大檀那の源（志佐）有は、元弘3年（1333）に少弐氏らとともに九州探題北条英時を討つなどの活躍が知られ、松浦党のなかでも有力な人物であったことがわかる。

松浦地方には湛勝の作品が数点のこっていて、この一派と松浦党との関係が深いことを想像させるが、本像の存在により、一層の厚みがくわわる。源氏再興の気運が高まったこの時代、成朝と頼朝により結ばれた奈良仏師と源氏の縁を、西国湛派と松浦源氏につなげようとするのは強引にすぎるであろうか。

ところで、寿昌寺はいまは臨済の禅寺であるが、かつては天台寺院であり、熊野信仰が盛んであった当地の不老山に開かれたといわれる。また、源（志佐）有は、寿昌寺の如意輪観音像造立の前年に、熊野系の志佐三所権現を再建したという。くわえて、不老山の山裾をながれる志佐川の下流には、補陀山観音寺がかつてあった。熊野信仰、山上の如意輪観音、川下の補陀落山の組合せは、熊野那智の補陀落観音信仰を連想させる。

西にひろがる諸外国との交流が目立つてきた松浦党のひとびとの視線は、東方の国内にも向けられていたのである。そして、その美意識をかたちとしたのは西国湛派の仏師幸心であり、半世紀にわたって九州が育んだ造形の力のはたらきであったといえないだろうか。